

近代日本女性史の方法 試論

——最近の方法論論争によつて——

古 庄 ゆ き 子

のだという、一般的な評価におわつたりする傾向もあつたと思います。という「まえがき」が書かれねばならぬ状況はある。

ここ五・六年の間に日本女性史の方法論にかかわる発言、論議が、「歴史学研究」「歴史評論」等々を舞台に、かなり活潑に行われてきた。書店にはコーナーが特設されるほどの多くの女性論、婦人問題、女性史等々各様の書物が出版されている。一九三〇年、三尺の机の上に「古事記伝」一冊をのせて、前途多難な日本女性史の科学的研究への第一歩をふみだした高群逸枝が、当時の研究状況をみわたして、

女性史という名の本は、もういくつか出てはいた。しかし、それはいわゆる女訓的な烈女伝的なものか、興味本位の恋愛逸話のようなものが多く、婦人の解放にとつてなら寄与しないのみか、反動的役割しかもつていない（高群著「火の国の女の日記」）と嘆いた時からすれば、質量ともに隔世の感がある。

もつとも新しい装いの「女訓的、烈女伝式のもの」も大量かかれています。「興味本位の恋愛逸話のようなもの」も減つてはいない。一九七二年に出版された米田佐代子の「近代日本女性史」（上）においてもなお

これまで女性史というと、とかく恋愛や個人生活の面が社会のうごきと直接かわりなくとりあげられたり、あるいは女性の抑圧された悲惨な面だけに目がむけられがちでした。また積極的な評価という、すぐれた個人の伝記になつたり、さまざまなたかに婦人も参加していた

個別研究も進んでいないわかい学問だということもある。対象が歴史の裏側に生きさせられた女性であるために、民衆史と同様、記録・文書を史料とすることの困難な場合が多いこともある。「若干の自由主義的学者からは同情の手がのばされ、またおなじ学生の間熱心に読まれた」が、「皇国史観の支配下にあつた学界からは当然黙殺された」（高群著前掲書）という草創期ほどのことではないにしても、「官学アカデミズム史学」の女性史に対する軽視は続いており、研究者はジャーナリズムを主要な発表の場として現状である。（伊藤康子「日本における女性史研究の歩み」。

歴史評論」No.280参照）これらは、よつてもつて女性史を真に学問の名に値するものに育てることをはばむ力として作用しているように思われる。

それにしてもここ五・六年の間に「史学の名に値する女性史の確立」を目指して、方法論がようやく研究者の間に論議されはじめたのである。論議は村上信彦氏の「明治女性史」全四巻の刊行（上巻一九六九年四月、中巻前篇一九七〇年五月、中巻後篇一九七一年四月、下巻一九七二年七月）、その方法論の提示（村上信彦「女性史研究の課題と展望」「思想」No.549）を契機に、諸家による村上氏の的方法論への批判、村上氏の反批判という形をとつて展開された。もつともそのすべての人々が「明治女性史」を直接問題としたわけではなく、村上氏との間に論争がおこなわれたわけでもな

ないが、いずれにしてもこれらの人々は村上氏の仕事を視野に入れて発言していた（視野に入れざるを得ないほど大胆な問題提起であったし、業績であった）し、村上氏の問題提起や仕事を通じて、戦後のもっともすぐれた業績として、研究者のみならず広く婦人のサークル等で読まれてきた井上清氏の『日本女性史』の再検討も必然的に要請されてきた。

今、その論者、論題をあげてみると次の通りである。

村上信彦「女性史研究の課題と展望」『思想』（No. 549）

伊藤康子「最近の日本女性史研究」『歴史学研究』（No. 376）

米田佐代子「現代の婦人運動と女性史の課題——井上清『日本女性史』な

どをめぐって——」『経済』（No. 83）

小田協子「日本女性史研究の問題点」『前衛』（No. 335）

村上信彦「女性史研究の性格と方法について——伊藤康子の批判に関連し

て——」『歴史学研究』（No. 380）

外崎光広「植木枝盛の婦人論をめぐる村上信彦・富田信男・熊谷開作氏

の所論批判」『社会科学論集』（高知短期大学）（No. 25）

大木基子「史学としての女性史の確立を——村上信彦『明治女性史』全四

巻の完結によせて——」『歴史学研究』（No. 400）

外崎光広「書評 村上信彦著『明治女性史』」『歴史評論』（No. 276）

犬丸義一「女性史研究の課題と観点・方法」『歴史評論』（No. 280）

村上信彦「読者のページ 犬丸あての手紙」『歴史評論』（No. 287）

村上信彦「『明治女性史』批判への小論——主として植木枝盛論——」『歴

史評論』（No. 294）

外崎光広「植木枝盛の婦人論について村上信彦氏の反論に答える」『社

会科学論集』（高知短期大学）（No. 29）

井上輝子「新たな女性史の構築をめざして」『思想の科学』（No. 51）

それに村上氏の最近著「婦人問題と婦人運動」『日本歴史』16（岩波

講座取）も加わるだろう。この中、村上・外崎氏の論議は植木枝盛の評価をめぐるのであったが、同時に方法論に相わたるものでもあった。

以上、村上氏の『明治女性史』刊行をもってはじまった感のある日本女性史の方法論検討は、当然近代における日本女性史のそれに集注することになった。例外的に西村凡子「前近代女性史研究の課題」『歴史評論』（No. 300）が書かれたにすぎない。ここでは『明治女性史』の方法をめぐる論議を通して近代日本女性史の方法を考えてみたい。

論議をよんだ村上氏の『明治女性史』全四巻は、「明治という時代」に生きた有名・無名の女たちの生活、社会運動も含む「結婚・教育・職業・意識の変化を全的に把握しようとする最初の試み」（「批判への小論」）として書かれたもので、豊富な事例、とりわけ氏自身及び知友を通して行ったという十余年にわたる聞き取り調査資料によって、有名女性の陰影を映し出し、又、自らの生きざまを記録することのなかった無告の女たちの体験や思いをも考察の対象としたユニークなものであるが、そのユニークさは、井上清氏の『日本女性史』への批判、それに導びかれた戦後の女性論、女性史研究や学習活動を虚妄とするところから出された、それからの克服の方法である。そこに大きな特質、性格がある。氏が、有名・無名の女たちの生活を全領域にわたり「全的に把握しようとする「最初の試み」といわれるなかに、『日本女性史』に対する批判と、自著に対する自負がうかがわれるであろう。

村上氏は井上氏の『日本女性史』を「階級闘争——解放図式に女性問題を解消してしまった」ものと把え、「あの時点で果たした役割を過小評価することはゆるされぬ」が、「この方法では特殊の女の問題、あるいは女性問題の特殊性は出てこない」（「課題と展望」）と批判する。そして更に「解放史は女性史の一部を占めるもので、けっして全部ではないし、前

者で後者を代表させることもできない。女の歴史が抑圧から解放への道をとったことはもとより明らかだが、もし解放という視点に立つなら、一般史における労働運動史と同様に、厳密には婦人解放運動史となる筈であって、巾ひろい女性史のなかの特殊研究となる。女性史はこれらの運動をもふくめた女の全生活の歴史なのである。（『明治女性史』上巻ま えがき）

という立場を明らかにした。これは井上清『日本女性史』の方法に向けられた批判の帰結であると同時に、「在来のマルクス主義史学」（『マルクス主義史学からみてどうかということよりも』という前置きがある―筆者）に対するそれでもあると村上氏はいう。（『犬丸への手紙』）

井上氏の『日本女性史』への批判は五十年代末ころから、断片的であるが、さまざまな表現をもってなされ、その批判の上に立つた著述もなされていた。^{注1}村上氏にいたってそれとの対決が全面的に企図されたといえよう。

二

今少し立入って村上氏の方法論にふれてみよう。

氏は『明治女性史』上巻「まえがき」、前掲『女性史研究の課題と展望』「女性史研究の性格と方法について―伊藤康子の批判に関連して―」等で、「在来のマルクス主義史学」による日本女性史の方法の欠陥をのべ、自らそれを提示している。『明治女性史』とこれらに見られる方法論はかならずしも一致していない。大木基子氏は「課題と展望」と『明治女性史』の間にみられる「ズレ」を両者間の「ズレ」よりも「『課題と展望』で提示した研究方法そのもののうちに内包されていたと言った方がよいかもしれない」（『女性史の確立を』）という。ここではこの「ズレ」は問題にせず、研究方法を論じた「まえがき」、個別論文を中心に考えることにする。大木氏同様「ズレ」の問題はそれらの中に内包されていると考えるか

らである。

井上清氏『日本女性史』以来の「在来のマルクス主義史学」による日本女性史を「解放史」と称する村上氏はその「根本的誤解や偏向」を次の四項目にわたってあげている。いささか長いが全文あげてみる。

第一に、解放史の立場に立つことによつて、歴史は解放された時点から過去をふりかえることになり、明治・大正は圧縮されたひと握りの過渡期となる。結論のためにプロットを組み立てられた推理小説のように、すべての過去は目的地にむかつて自動的に進行せざるをえない。だがこれは事実と反するし、生きた人間にとつて過渡期の時代というものは存在しない。ある時代が次のまたは次の時代の準備期になるということは、すでに到達した地点からの非歴史的な幻想的な解釈である。

第二に、解放にいたるまでのコースがすでに引かれているために、それに役立つ事件や人物が選みだされ、役立たぬ素材は淘汰される結果になる。あるいは淘汰しないまでも、副次的存在とならざるをえない。たとえば一揆と無関係だった農民や、争議をおこす条件をもたなかった労働者や、平凡な家庭に生涯埋もれておわつた主婦達がそうである。かれらは歴史の発展に寄与しないという理由で黙殺されるか、十把ひとからげに片づけられる。また娼婦運動は運動として注目されるが、そのもとである娼婦の悲惨な生活は十分に検討されない。なぜなら彼女たちは無気力な存在だったからである。だが無気力ないし無自覚とみなされている女たちが過去の時代に大半を占めていたとすれば、その膨大な現実を無視して歴史が語れるであろうか。これは現実を一定の目的のためにふりにかけることである。したがって声なき女性が大半を占める明治の時代はきわめて簡単に処理されてしまうことになる。これまでの女性史の多くが図式的絵解きにおわつて、歴史的な実感に乏しい理由の一つはここにある。

第三に、解放史で女性史を代表させようとすると、描かれる人物や事件の意義は、どれだけ解放の線に沿っているかどうかで評価されるが、その評価はじつは現在の時点からくだされるので、当時の客観的行情は見失われやすい。そのために、当時としては適切で役に立った思想や行動が生ぬるいものとして低く評価されたり、急進的ではあるが実際には観念的だったものが高く評価されたりする。明治になってから幕末志士の妻を顕彰したのおなじようなことが、民権運動のなかの女の役割や明治後期の社会運動における女の活動についても起っている。これらはいずれもあとから付け加えられたので、現実との対比を欠いており、歴史的に誤りであることが多い。

第四に、無意識の評価の誤りのほかに、解放の意義を強調するあまり事実の色づけが行われることすら起っている。抑圧—解放のコースがあまりはつきりしていることから、この二つはいわば極概念として対立し、すべての現象をこの二つの極のどちらかに引きつけて解釈しようとするのである。明治に生きた二千万の女性を忍従と逞しさの二つの型に分けて疑わないのも、この種の単純化のあらわれであるし、富岡製糸工女にのちの女工哀史の面影を見出そうとしたり、活動の舞台が特殊だったために福田英子を神聖化したりするのもその一例である。だが歴史は安手の田舎芝居の善玉悪玉の対立のように単純化されない。ひとつの事件、ひとつの人間のなかにも矛盾や葛藤があり、保守と進歩の錯綜がありうる。それをあるがままにとらえるには、できるだけ先入観を排除しなければならぬ。(上巻まえがき)

以上をあげた村上氏は「女性史の不毛と衰弱を救い出すには既成概念や公式理論から抜け出して、まったく白紙の状態から出発し直すべきだ」として、その方策をあげている。要約すると

第一、事実をできるだけ豊富にあつめ、データはどんなものでも尊重す

ること。

第二、歴史的事実の重みをとらえるために、集めた事実是他の事実との対比においてみることを。

第三、データに評価を下すとき「現在のモノサシ」でなく「当時の状況に密着しているか遊離しているか」を問うこと。

第四、女性史の対象を無名の「圧倒的多数」の女性の能力や「逞しいエネルギー」におくこと（「課題と展望」）

となるであろう。

以上の批判と方策を通してみられるのは実証主義の提唱である。村上氏は「在来のマルクス主義史学」による女性史にこれをもって対置すべきものだとしている。それは「解放の時点」から過去をみるのではなく、一時代をそれ自身として把えること、とりわけ明治に対する復権の主張、「体制に順応して生きた」「無気力ないし無自覚とみなされている」「大多数の女性」たちの復権、その生活、エネルギー検証の必要性の力説、事件、人物、事象の評価を当時の状況のなかにおくこと、の主張すべてに一貫している。

しかし氏は基本的に「女性史」が「解放の歴史」となることを否定するわけではない。

女が抑圧から解放のコースをたどることは歴史の必然であって、世界的に共通に見られる事実だから、女性史は結果から見れば解放の歴史となることは議論の余地がない（「性格と方法について」）

だが、これは「女性の地位と生活と解放の問題を」「ひろく社会全体のしくみ、その政治や経済や文化の全体の歴史ときりはなすことのできないものとして、全歴史的、法則的にとらえようとした」(井上清『新版日本女性史』新版のために)井上氏の方法とは全く異なるものである。ここで注目しなければならないのは「事実」と「結果から見れば」である。ここで注目すべきは「歴史的必然」であり「世界的に共通に見られる事実」だから、その

「事実」をたどっていけば「結果」として「解放の歴史」になるという認識の仕方は実証主義がもたらすものであろう。

三

村上氏の方法に対するもつともみのり多い批判者は大木基子、米田佐代子、井上輝子三氏であったと筆者は考えているが、いずれもその豊富なデータに支えられた『明治女性史』に「そつちよくに賛意を表さねばならぬ」（米田「『女性史』の課題」）といい、「そのような長所を認めただ」（大木「女性史の確立を」）発言しているのだが、その豊富なデータを支える論理そのものに言及しないで個別事項の批判をしても、村上氏には批判たりえないであろう。いささかパセテックな表現で井上氏の『日本女性史』を擁護し、村上批判をきびしく行った伊藤康子氏が、そのことにかぎっていえば、もつとも村上氏の本質をついていけるといえる。つまり氏は村上氏の方法が「井上女性史批判と、井上女性史を捨てたところから出発する女性史の方法と展望である」ことを明らかにした上で、村上氏の方法を批判しているのである。しかし氏の場合も、村上氏の実証主義を正面にすえて論ずるのでなく「要するに実証を強めようということであって、歴史研究として当然のことである」（伊藤「日本女性史研究」というふうに流してしまった。「実証を強めよう」ということと実証主義とは異なる。村上氏は井上清氏の『日本女性史』を捨てて手ぶらで出て来たのではなく、実証主義を掲げてこれに対峙しようとしているのだ。伊藤氏は井上氏の『日本女性史』を村上氏が捨てたかどうかではなく、その対峙した方法が何であつたかこそ見るべきではなかつたらうか。

米田佐代子氏は村上氏の方法論としての実証主義にはふれていないが、女性史の課題を「現代の婦人運動をどうとらえるか、いいかえればこんに

ちの婦人問題の本質をどうかんがえるか、という立場から」検討すること提起することによって、結果として、村上氏の実証主義のおちいついている、歴史を歴史たらしめる主体、歴史から誰が、どのようなものを発見するかという問題を明らかにしている。

村上氏は現代を「解放の時点」と把え、「解放史」がその時点から明治、大正期をみるために、その時代は「圧縮されたひと握りの過渡期」となつてしまつていくという。そして「これは事実と反するし、生きた人間にとって過渡期の時代というものは存在しない。ある時代が次の・または次の時代の準備期になるということは、すでに到達した地点からの非歴史的幻想的な解釈である」と批判する。それは「あらゆる時代の人間はその一生を精一杯に生きてきた。埋草であつてよい人生はひとつもなかつた」（上巻まえがき）というヒューマニステックな人間観と同根なのだが、「既成概念」「公式理論」「現実を一定の目的のためにふるいにかける」いっさいの理論の介入を否定するこのヒューマニズムは、膨大な事実の無秩序な（現象的なあるがままのといつてもよいが）山積みをつくり出し、学問的考察を困難にするだろう。（少くとも論理の上では）。大木氏も批判しているように、学問的考察には、いずれにしろ抽象化、一般化、法則化がともなわずにはいけないからである。

氏はこの膨大な「事実」をたどっていけば「結果」として「解放の歴史」になるといふ。資料のあつめ方やつかいかたにきびしいわりに、女の解放は「歴史的必然」であり「世界的に共通に見られる事実」として疑いなく受け入れる。その担い手がどの層から、どのような形で形成されてくるかは論証の外におかれたままにである。

氏は歴史を「無数の人々の体験の結果を追跡することである」とし、「レールは終点までつづいていても、すべての時代の人々はじぶんの人生駅で下車したのである。その人たちがなにを見、なにを感じ、どのようにに反応

したかを観察することによって、はじめて生きてきた人間の歴史を再現することが出来る。」という。過去の特定の時代の人間をその条件のなかにおき、その時代の人間の思考の中で捉えねばならないのはもちろんだが、それはわれわれがそこに帰ってしまうことではないだろう。特定の時代の人々の悩みやかなしみやよろこび、生き方の中に歴史の意味を発見するのは、現代に生きていくわれわれなのである。氏の「生きた人間のいる歴史」の提唱は個々の体験の追跡を集積するだけでは果せないと考える。筆者は「激動の七〇年代といわれるこんにち、婦人のたたかいてもまた、かず多くの困難に直面しつつ、かつてないほどの前進をとげようとしている」という現状認識の上に立って、現代の婦人問題の本質をどう考えるかを問い、女性史の課題をその中で検討している米田氏の方が歴史の発見、そのうけつぎ方として正しい方向を示していると考ええる。

現在を「解放された時点」「有り余る自由を手にした」時とする村上氏の場合、歴史の発見は、「好きな男と一緒にいるためには手鍋さげて長屋住いも辞さない女が無数にいた」、「余暇はめったに得がたい貴重なものだったから、手ざわり確かな充実したものであった」（上巻―地方―女の生活）明治の女たちの発見ということになる。そこには「有り余る自由を手にしたもの」が自由を使いこなせずに、さまざまの醜悪な人間破壊の姿をさらしているという現状認識が裏打ちされている。現下の日本に、全き意味における「有り余る自由」を享受している女性がいるとは思えないのだが、村上氏はきわめて楽天的に「解放の時点」として現在をとらえる。氏の中では幼年期資本主義下の女たちの苛酷さが尺度となっているために、「華麗なる貧乏」や「自由の名の下での自己規制」が存在する現状の複雑な苛酷さがとらえきれないのではあるまいか。

氏の現状認識は明治の女性への礼賛をよびおこす。氏は「人間の強さ、逞しさ」を「制度の古さ新しさとも、権利の多少とも関係のない地点で、

いつも比較できるもの」として「個人の内的エネルギー」をあげ、それをもって明治と昭和戦後の女性を対比、「時代の進歩と個人の成長とは必ずしも一緒にならず、時代が進めば自動的に人間が向上するものではない」（同上）と結論する。そして「私たちの母や祖母」の「一見平凡な生活様式の内部で、どれだけの緊張や努力やたたかひがあったかを掘り起して見直す」ことによって「過去は単なる過去」でなくなり、「現在論じられていく女の能力やエネルギーや可能性」について「学ぶべき歴史の実証」を示す原点だという。（上巻まえがき）だが外的諸条件を除き、「内的エネルギー」の歴史的・社会的質も問わない「強さ・逞しさ」の比較は、おもしろくはあっても歴史をどう受けつぐかという問題に役立つか疑問である。家族制度、地主制の下で形成された体制的「強さ・逞しさ」は、否定的媒介項を幾重も経なければ、女性解放へ赴くエネルギーに転化しにくい質のものであることは体験的に明らかである。氏は「女の歴史は業績の歴史でなく無限の可能性の歴史であった」といい、「条件さえ与えられれば顕在化したにそういない潜在的能力を正しく評価すること」を「女性史の最大眼目」だとする。「男とくらべ無数のハンディキャップを背負った女の生活を理解」するのに「社会的業績」でなく「潜在的能力」をもってするこの視点は魅力的である。階級社会の中では女はつねに「潜在的能力」たらざるをえないからである。だが村上氏はこの「潜在的能力」のなから立ちあがって自ら解放の条件をつくろうと模索し、行動した人々を大多数の女たちから切りはなすことで、「潜在的能力」信仰におちいっていないだろうか。井上清氏の「日本女性史」を「庶民べったり信仰」と評した村上氏の中にも、奇妙にそれを見ることができるよう筆者は考える。

明治への愛情とともに村上氏が明治を発見した理由はそこに「その後の歴史に重要な萌芽をすべて含んでいる」とみたからであった。氏は「解放運動が露わな形をとるに至るまでの試行錯誤、解放運動の生みの悩みをも

のがたる土壌や状況を十分跡づけることが解放史に大きなプラスになる」(「性格と方法について」という、明治への正当な評価・位置づけをする。しかし前にもみたようにこれが一貫せず、明治礼賛、「潜在的な能力」信仰に終っているかに見える。井上氏の「日本女性史」への批判が、明治、大正を「圧縮されたひと握りの過渡期」とすることへの拒絶となり、とりわけ明治への愛情をよびおこしたのであろうことは筆者にも理解できるように思う。しかし、「解放運動が露わな形」をとっている現在は、それ「至るまでの試行錯誤、解放運動の生みの悩みをものがたる土壌や状況」の意味や性格の把握をも可能にしているのであつて、村上氏のように現状否定に立つて明治に学べとするところからは、明治がむしろ見えなくなるのではあるまいか。

現代の婦人問題、婦人運動を通して明治・大正をみるということは、現在の尺度で過去を計ったり、「現在の感覚で大正女性の悩みを批判したり、まして明治女性の苦しみを古いと片づけたりする」(「課題と展望」)非歴史的態度ではない。むしろそこにおける女性の悩みや苦しみの意味を明らかにし、事実をより豊かに認識することになるだろう。萌芽期だけでは意味不明な事実も、より露骨に顕在化した時点からは鮮明に認識されうるからである。

村上氏の女性史のもつともユニークな方法は、演説や文章にあらわれた意見それ自身の革新性よりも、それが「当時の状況に密着しているか遊離しているか」を問い、彼や彼女の性格や日常生活を検証することによって、その思想が自分のものであつたか借物であつたかをたしかめるところにある。女の生活が観念の上での自由や解放で開かれるにはあまりにも重いところで営まれていることを村上氏は知っている。何千年という時代の中で一種生理的にまでなっている女に対する蔑視は階級社会の廃絶によつてもただちに消えてはしまわぬ程根深いものようである。村上氏は、特定

の状況の中にいるわたちの困難を切りひらく有効な論理と、その論者の論理がその人物の日常行動まで貫いていることを要求する。六〇年以降、「進歩的指導者」の論理と日常生活の乖離が目に見えてきたし、特に女性解放運動についても男性指導者の後進性、保守性が言われてきている。さらに、過去の運動の中に当然のように行われてきた女性差別が聞き書きなどによつて明らかにされてきつともある。村上氏がそれを女性史の方法として提起したのは、直接にはそれらの動きと無関係であるかも知れないが、六〇年末から七〇年前半の思想状況と対応していることはいえるだろう。

とにかく氏によつて福田英子、植木枝盛等に対する在来の評価に疑問が出され、後者については、外崎光広氏との間に資料段階からの論争が重ねられている。大木基子氏は、村上氏がある一つの思想をとらえる時、「その思想の精緻さ、純粹さ、自己完結性を問題とするよりも、状況への密着度という機能面にとらえる」ことを指摘した上で、思想と行動と乖離が問題になるのは、「一集団なり一個人なりの思想と行動との接合のしかたを問うときであつて、ある思想の客観的機能とは全く別の次元の問題」ではないかという。(「女性史の確立を」)筆者も大筋において大木氏と同様の意見をもつものであるが、思想に問われねばならぬのは「精緻さ、純粹さ、自己完結性」の問題ではなく、現状に密着しながら、その現状認識をどれだけ広範な人間生活の洞察に高め、深めているか、歴史的人類的課題をどれだけ包摂しえているかにおくべきだと考へる。思想家が直ちに自らの思想を生きるかどうか、生きられるかどうか、それも、一種生理的習慣となつている女性差別の中で日常生活万端にいたるまで女性解放の思想で生き抜いたか、を検証するとするなら、ほとんどの思想家、解放論者は失格するにちがいない。村上氏が景山英子に虚言家、ナルシストを見、植木枝盛の娼婦運動の陰にあつた郭通いを指摘するのは、今までの歴史家が作つた虚像を正す仕事として評価しなければならぬだろう。だが婦人問題、

婦人論に種を播いたこれらの人々が、同時にのがれがたくその時代の人であり、下半身を、あるいは首までを当時の生活様式や社会的習慣の中にどっぷりとつけて生きていた事もまた考えねばならないだろう。村上氏は個人的性格・生活を強く持ち出すのだが、彼らの思想（思想そのものもその制約をうけるが）を裏切っていく生活習慣、社会通念の重さを媒介にしなければ、性格や生活の検証は、一種の女房リアリズムの域にとどまるのではあるまいか。

筆者は生活と思想の乖離を追求することに賛成である。ますますそれはしつかりしたものにしなければならぬと考える。同時に女性解放の旗印をかかげた人々の、当時の状況を無視したかに見える言論の意味をも見失ってはならないと思う。村上氏は「圧倒的多数の女性」が「体制に順応して生きたことはこの上なく自然であった」という。筆者は同様に先進的言論をつくり出した人々が、一方その首まで同時代の生活習慣の中にひたして生きたことも自然だと考えるがどうであろうか。

四

村上氏の方法のもっともすぐれた点は、女性の抑圧＝解放のコースを日本の近代という一定の条件下でみようとするとところにあると思われる。

抑圧＝解放のコースはアメリカでもヨーロッパでも日本でも変りはないが、その過程はそれぞれ異なっている。いうまでもなくそれぞれの国はそれぞれの社会的条件をもっていたからで、その特殊性を明らかにしなければ解放史は歴史として成立しない。換言すれば抑圧＝解放のコースは研究対象でなく、一定の条件下の解放コースが対象なのである。

（「性格と方法について」）

もっともこれは女性史の中の特殊研究として「解放史」なるものを位置

づけるという前提に立ってであって、この構想そのものには大きな問題がある。

氏は既存の「解放史」においては「それに役立つ人間」がえらび出され、「役立たぬ素材は淘汰される」又は「副次的存在」となっていることを批判して「無気力ないし無自覚とみなされている女たちが過去の時代に大半を占めていたとすれば、その尨大な現実を無視して歴史が語れるであろうか」という。その結果この大多数の人々を軸とする女性史を立てようとするのだが、この事実こそ日本の特殊性なのであって、「尨大な現実」をぬきにしては日本の女性解放は考えられないのである。大多数の女たちを軸とする女性史、その特殊研究としての「解放史」という構想でなしに「解放史」の中で日本の特殊性を明らかにすれば、当然この「尨大な現実」に行きあたるはずである。筆者は村上氏の提起した問題を「家」が大きな役割をもつ日本の近代の特殊な成り立ち、その中における婦人解放の道すじの解明という風に積極的に受けとり、理解する。そのためにはこの「尨大な現実」の実態が実証的につかまなければならないことは言うまでもない。しかし先進的婦人運動や労働運動とこれら大多数の女性の動きを切りはなすのでなく、両者をかかわらせ、その影響、対応関係を明らかにしなければならぬと考える。婦人労働者はこの「大多数」のなかから創出されたのであり、小作争議の女たちもこの中の女に外ならなかった。それらと無関係に生きた「大多数」もまた即目的に生きたのではなく、明治以来、婦人会、処女会等々の形で体制側から組織された人々であった。彼女たちへの教化は、婦人運動、労働運動の高揚期ほど強化されたのである。私的領域でしか生きられなかった女へ対する支配の論理がたぬかれていたことを忘れてはなるまい。

とはいっても歴史の基底部を生きた女性の時間は、民衆のそれと同様、社会発展や政治レベルの変動を直ちにうけるのではない。だが井上輝子氏

提唱のように、速度の遅い停滞的「私的領域」の発展、展開を「いわゆる上部構造、下部構造論とは別の枠組みで構想」する（「新たな女性史の構築をめざして」）のではなく、その中で、独特の個性的形態をさぐり出すところが必要であらう。

豊富に収集された資料ではあるが、それを統括する論理を放棄し、したがって個々の事実の評価は恣意にまかされてしまう村上氏の実証主義にはくみしがたい。しかしそれは豊富な資料収集を少しも否定することではない。資料はますます精力的に集められねばならないし、個別研究を進める必要もある。「解放史」が見捨てた事実や人物も広く調査されねばならない。反動的役割をもつた婦人会、処女会の研究など「大多数」の女たちにもっともかわり深いものとして解明される必要を感じる。個人の研究もまた同様である。その意味で「思想の科学」（No.51）が「体制を支えた女性史」を特集したのは注目してよい。これら豊富な資料自身の中をつらぬく歴史の法則性を発見するとき、井上清氏の構想力に代わる構想力をもつ女性史が生れるのではあるまいか。

注1 宮城栄昌、大井ミノブ著「日本女性史」吉川弘文館 59年5月刊

原田伴彦著「日本女性史」河出書房新社 59年8月刊

林屋辰三郎編「紅と紺と—日本女性史」朝日新聞社66年5月刊

以上の編著はそれぞれの表現で、今までの女性史が女の不幸を強調し、暗いものであったことを批判し、「日本女性の歴史が千数百年悲哀と圧迫に充ちて、なんら歓喜も誇りもなかったということはある得ないことである」（林屋）に代表される立場に立つて書いている。なお林屋氏は女性史に解放史以外の観点がまったくないわけではないという考え方を提起している。

注2

山代巴・牧瀬菊枝編「丹野セツ—革命運動に生きる」勁草書房69年に月刊。牧瀬菊枝「解放運動とおんな」講座「おんな1」なぜおんなか」筑摩書房 72年12月刊。

○二ページにあげた論文を引用した場合は、その論題を適宜に省略した。